子ども虐待予防支援の課題

関西大学 教授　山縣　文治

１．虐待予防の必要性

2023年６月、神戸市西区で６歳の男の子が、虐待により死亡した。複雑な家族関係、児童相談所の関与、助けを求める子どもの生の声。現時点では、細かい背景や、死亡に至った理由は明確ではないが、なぜ死亡を防ぐことができなかったのか、多くの人が心を痛めたことと思う。

私は４人の仲間と月刊福祉（発行：全国社会福祉協議会）という雑誌で、８年間、社会的養護のもとで育った子どものインタビューを続けてきた。インタビューをした子どもの人数は100人近くになる。

「何をしても叩くんなら、今日の分は早く終わらせてほしい」

「心と身体を切り離して、虐待が終わるのを待っているんです」

「身体だけそこに置いておいて、心はよそに置き、それを見ている私がいるんです」

継続して激しい虐待を受けてきた子どものなかに、比較的多くみられた発言である。「どのように抵抗しても虐待が繰り返され、反発するとさらにひどくなるなら、いっそ早く終わらせてほしい」。このような状況に陥ったものは、心と身体を分離させ、外から自分の身体に起きていることを見ているという、解離状態になることがある。

虐待発生予防は不可欠であり、発生予防のための提案も多くされている。それらを踏まえた取り組みも、公的、私的になされている。ここでは改めて、虐待発生のメカニズムを明らかにするとともに、予防の視点からその対応のあり方を考えてみたい。

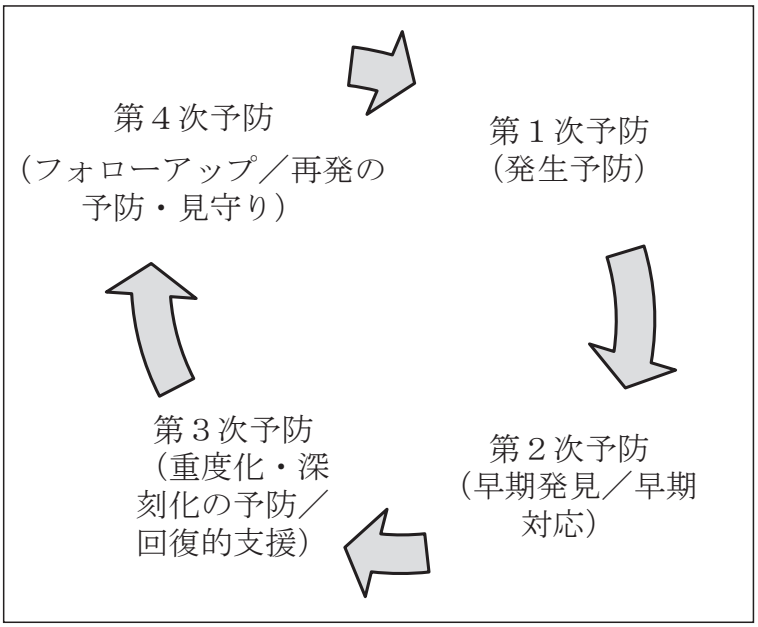
２．予防の視点：循環する予防の４段階

予防は、一般に、発生予防（第１次予防）、早期発見・早期対応（第２次予防）、社会復帰の支援・再発防止（第３次予防）の循環として捉えられることが多いと思う。

私は、一般論としては３段階論を受け入れつつも、とりわけ虐待支援においては、４段階の循環論としてとらえる必要があると考えている（**図１**）。３段階論との違いは、大きく以下の３点である。

第１は、第２次予防を、早期発見・早期対応（新たな第２次予防）、重度化・深刻化の予防（新たな第３次予防）に分けていることである。早期発見・早期対

図１　虐待予防支援の４段階



応は、一般には、軽度な状態なら短期で解消できるというニュアンスで受け止められがちであること、何よりも、早期発見・早期対応としての制度や実践と、重度化・深刻化の予防としての制度や実践は様相を異にすること、が２つに分ける理由である。

第２は、新たな第３次予防に、回復的支援を位置づけている点である。回復的支援とは、子どもおよび虐待者である保護者を含む家族全体を支援するもので、心身の傷つき、人間関係の崩壊、親族や地域社会・関係機関との対立構造などを回復あるいは改善することを目的とする。

最後は、新たな第４次予防に、見守りやフォローアップを明確に位置づけている点である。子ども虐待の場合、分離保護や一時保護解除後、あまり時間を経ない状況で、死亡や重篤な障がいに至った事案もある。したがって、フォローアップを再発予防のなかに埋没させるのではなく、明確に位置づけることで意識化を図る必要がある。

３．虐待の発生のメカニズムと「虐待の壺」

１）「虐待の連鎖」という用語の危険性

冒頭紹介したインタビューのなかで、数人の子どもが「自分は、親になってはいけない」と答えた。「虐待は連鎖すると聞いたので、きっと虐待してしまう」、「自分のような辛い人生を、子どもに歩ませたくない」などの理由である。

子どもたちのこのような経験が、「虐待の連鎖」という表現には慎重でありたいという思いを筆者に生じさせた。確かに、子どもを虐待した人のなかには、自分自身が子どもの頃に虐待を受けた経験がある人はいる。しかし、子どもの頃に虐待を受けた経験がある人の多くは、少なくとも、通告対象となるような虐待をすることなく、子育てをしている。一方で、その逆もあり、子どもの頃に虐待を受けていなくても、子どもの虐待をする保護者はいる。

重要なのは、「連鎖」を包含しつつも、「すべての人が虐待をする可能性がある」という視点で、虐待の発生のメカニズムを考えることである。

２）「虐待の壺」という考え方発案の契機

困難な生活環境（リスク状況）の中にあっても、何とか生き延びている人がいる。アメリカのソーシャルワーク研究者、マーク・フレイザーは、リスク要因と防御推進要因（protective factor）という概念を用いて、リスク状況の中でも生き抜いている人たちの特性を明らかにし、支援の在り方を明示した。

フレイザーは、防御推進要因を、「リスクがある場合に発達結果が不十分になる機会を低減する特性や諸条件」と定義している。すなわち、リスク状況にあったとしても、防御推進要因が機能していれば、生き抜いていける可能性があるということである。「ネガティブな連鎖反応を軽減することは、ストレッサー（ストレスの元）とそれがもたらす結果のつながりを断つことを含んでいる」とも言っている。

「ネガティブな連鎖反応」とは、まさに「虐待の連鎖」である。防御推進要因がそれを軽減させるというフレイザーらの考え方に準拠すると、「虐待の連鎖」という言葉を用いることなく、虐待発生のメカニズムを示し、支援の在り方を考えることができるのではないかという思いに至った。

3）「虐待の壺」の概念

大前提として、すべての人は虐待をする可能性があり、それを内包するものとして「虐待の壺」が体内にあると想定できる。この壺は、極めて不安定な立ち方をしており、支えがないと倒れてしまう。また、内部から押すと大きくなったり、強く刺激をすると壊れたりすることもある。

壺の中には、虐待の発生を抑制する要因（●）や、虐待の発生を誘発する要因（★）が入っている。発生抑制要因は、防御推進要因に相当する。これは、壺が傾かないように、常に壺を支えている。そのなかのいくつかは壺の中に入り、虐待誘発要因に攻撃をかけ破壊したり、虐待誘発要因の作用で壊れかけた部分を補修したりする。さらには壺そのものを拡張するなどの働きもする。

一方、虐待誘発要因は、リスク要因に相当する。これは、壺の内部で暴れることもあるし、外部環境から壺を揺らすようにぶつかってくることもある。そのなかのいくつかは壺の中に入り、発生抑制要因に攻撃をかけて破壊したり、壺そのものを壊したりすることもある。

発生抑制要因および虐待誘発要因、壺の中に入ったそれぞれの要因は、結合したり、増殖したりすることで、より大きな要因となることもある。発生抑制要因のなかには、保護者自身が内的に学習し育んだものも多くあるが、環境や制度からの支援が非常に大きな意味をもつ。

図２　発生抑制要因が機能している状態

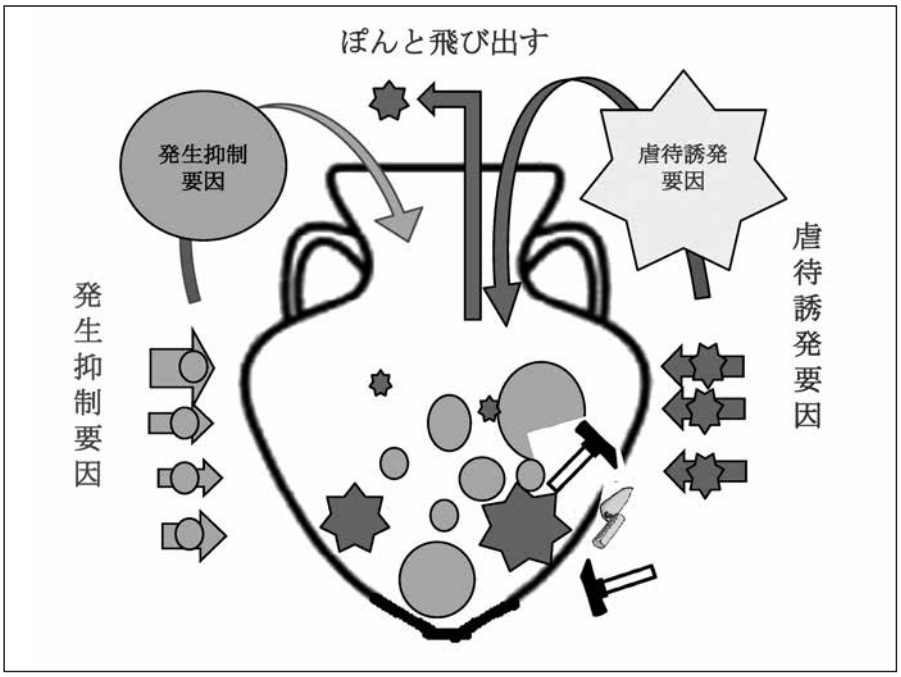
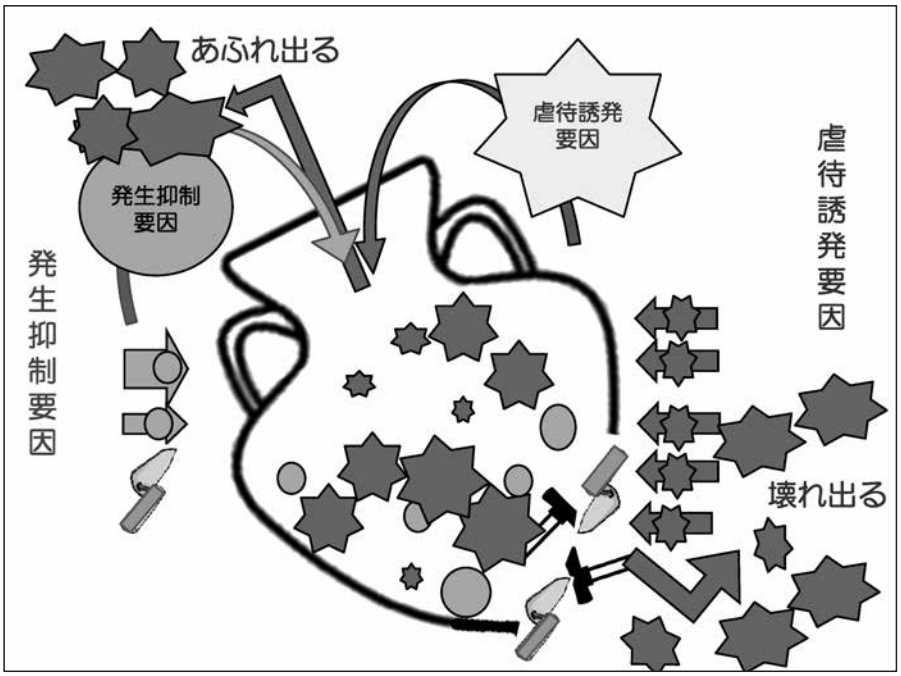


図３　虐待誘発要因が優位な状態



4）虐待発生のメカニズム

虐待は、以下に示す３つのパターンで発生すると考えられる。

①ぽんと飛び出すパターン

壺の中に新たな虐待誘発要因が飛び込んだ弾みで、少数の虐待誘発要因が壺から飛び出し、単発的な虐待や体罰行為が

生じるものである。ただ、それらは、虐待行為や体罰に当たるとしても、陰湿ではなく、軽度であり、かつ一時的なものである（図２）。保護者自身の内的抑制力もかなり機能しているし、外部環境としての発生抑制要因が早く機能すれば、比較的簡単に抑制することができる。

②あふれ出るパターン

外部環境としての発生抑制要因より、虐待誘発要因の機能の方が優位で、壺が傾いた結果、壺の口から虐待誘発要因が連続してあふれ出るパターンである（図３左上）。このような状況になると、外部の発生抑制要因を集中的に投入し、壺の傾きを修正しなければ虐待が頻発することになる。時には親子の分離保護も必要となる。

③壊れ出るパターン

壺の内外にある虐待誘発要因の攻撃により、発生抑制要因が補修を試みているにもかかわらず、壺が壊れ、そこから次々に虐待誘発要因があふれ出ることで、虐待を起こすパターンである（図３右下）。この場合、外部から発生抑制要因を多く投入しても、壺の傾きを直すのが精一杯で、虐待は収まらない状態になる。

ましてや、壺の内部も発生抑制要因が虐待誘発要因に侵襲され、保護者自身の努力だけでは対応が不可能となる。壊れた壁の修復作業が必要であり、さらなる発生抑制要因の強化でも対応できない場合、原則として分離保護となる。

４．虐待予防支援の意味

予防は、発生抑制要因の配置、強化を意味する。たとえ虐待誘発要因が存在しても、保護者の内部や保護者を取り巻く環境に存在する発生抑制要因がそれ以上に機能する状況であれば、虐待の発生そのものを抑えることができる。また、保護者の内部や保護者を取り巻く環境に存在する発生抑制要因を強化することにより、早期発見・早期対応ができることになる。

逆に、虐待誘発要因が少ない場合でも、発生抑制要因が十分に機能していなければ、虐待は発生する。ましてや、虐待誘発要因が増殖している状況では、発生抑制要因そのものの機能が押さえ込まれ、虐待が頻発したり、エスカレートしたりする。さらに、このような状況では、本来発生抑制要因であったものが、虐待誘発要因に転化することもある。

以上のように、虐待予防支援において重要なのは、虐待誘発要因の排除あるいは弱体化以上に、発生抑制要因の配置、および発生抑制要因と虐待者の友好的関係の強化である。これは、虐待を受けた子どもに対する支援においても同様で、このような支援を長期的に受けることで自らが保護者になったときに、虐待をしない子育てに近づくことができる。

虐待は発生そのものを防止しなければならない。しかしながら、現実にはこれをゼロにする事は困難である。したがって、予防以降の循環を通じて、これに対処することが現実的な対応と考えられる。私たちは、専門家として、家族として、一市民として、さらには当事者として、これらのどこかに、何らかの形で関わる必要があることを意識したいものである。